

ハイドンの喜劇オペラ「月の世界」

川口 ひろ子

「オペラサークル」は、モーツァルトや同時代に作られたオペラを映像で鑑賞する会員数十五人程の小さな団体だ。コロナ禍の為一年程休会が続いたが先日再開された。上映作品はハイドンの喜劇オペラ「月の世界」。発表者Yさんの詳細な資料が事前に配信され、モーツァルト作品以外には関心の薄い私には有難い解説書となった。

フランツ・ヨーゼフ・ハイドンは三十年にわたりハンガリーの大貴族エステルハージー家のお抱え音楽家を務めた。器楽曲の大家としての評価が高いが生涯で十三のオペラを作曲している。しかしこれらの全ては忘れ去られ再演されることはなかった。今回の「月の世界」が研究者によって高い評価を受け、再演されたのは二十世紀に入ってからである。

上映されたDVDは二〇〇九年十二月ウィーンのアン・デア・ウィーン劇場での公演を収録したもので、指揮はニコラウス・アーノンクール、衣装や舞台装置から察して現代のお話しに読み替えられていた。あらずじは、男女六人三組の恋人たちが、自分たちの結婚に反対する頑固で好色な老人に、美人の住む月の世界へ行ける秘薬と称して睡眠薬を飲ませる。夢うつつの老人は二セの月の世界を本当のものと思いこむ。派手なドタバタ劇などいろいろ続いた挙句、とうとう結婚が認められ「目出度しめでたし」で幕となる。

歌手では、若者達にいびられ女装させられたり、半裸にさせられたりして右往左往する頑固な老人を演じたディートリッヒ・ヘンシエルが、歌唱力、演技力共に抜群の冴えを見せてくれた。しかし何といつても立役者は、上品とは言えないこのドタバタ劇を、程よいテンポで洗練された喜劇オペラに纏め上げたアーノンクールと彼が育てた古楽楽団「コンツェルトウス・ムジクス・ウィーン」である。繰り返しが多く退屈というバロックオペラの特徴はすっきりと整理されていた。

久しぶりに同好の志と楽しんだオペラ鑑賞、心地よい充足感に満足の午後であった。